

生涯学習における学習履歴の可視化・デジタル化に関する調査研究

-オープンバッジの活用を通して-

山川 肖美 (広島修道大学)

○天保 信子 (広島県立生涯学習センター)

○吉長 愛 (広島県立生涯学習センター)

本調査研究は、オープンバッジの活用を通して、生涯学習における学習履歴の可視化・デジタル化について調査研究を行い、その成果と課題をまとめ今後の取組について考察したものである。文部科学省の「デジタル技術を活用した多様な生涯学習の学習履歴の活用に関する調査研究」の一環でもある。先行研究から、生涯学習分野における学習成果の評価・活用を推進していく上で、学習履歴の証明、その成果に対する評価の可視化、広く活用していく仕組みの3点が必要であるにも関わらず途上にあることを把握した。

そこで本調査研究では、広島県立生涯学習センター（以下「当センター」とする。）の五つの事業（生涯学習振興・社会教育行政関係職員等研修【社会教育経営論】、同【生涯学習支援論】、親プロファシリテーターフォローアップ講座、親プロファシリテーター養成講座、アウトリーチ型家庭教育支援研修）に位置づけて、学習履歴の可視化における「オープンバッジ」の可能性を探究することとした。「生涯学習パスポート」に代表される紙媒体での学習履歴の可視化と、デジタルツールを用いたそれとの異同も見えてくる可能性も想定した。

令和5年5月から令和6年3月末までに当センターが発行したオープンバッジは、127個で受領者は98名であった（4個受領が1名、3個受領が3名、2個受領が20名、1個受領が74名）。受領者を対象としたアンケート結果については当日報告する。

最多受領者には半構造化インタビュー法を用いて調査も実施した。その結果、「ウォレットにオープンバッジが貯まると嬉しい」「どんどん違う人と話をする機会となり、お互いのスキルアップや知識の向上につながっていくのがよい未来だと思う」等の回答を得た。

その後のオープンバッジ受領者交流会では、同じ種類のオープンバッジを受領した人同士が同じグループとなり、意見交流を行った。その結果、各市町で活動されている方々が、オープンバッジを通じてつながることができた。振り返りアンケートにおいて、受領者交流会に参加して「楽しかった」と回答した人は100%であった。「一つのテーマについて話をすると、他の人のアイデアをきっかけに自分のアイデアも誘発される感覚が楽しかった」「社会教育や生涯学習、公民館について何かしら熱量を持った職員同士がコミュニケーションを取れる場があることによって建設的な意見交換ができることに心強さを感じた」等の回答があった。

今回の取組と調査において下記の知見を得ている。

- 1 学習履歴の証明方法として多くの人がデジタルでの証明を望んでいる（受領者アンケートの結果としてデジタルを希望44.9%、紙とデジタルの両方を希望54.1%）。
- 2 オープンバッジを複数受領することによって、集める楽しさや価値に気付き、他者に勧めたいと考える人の割合が増える傾向にある。
- 3 オープンバッジを受領することで学びに対するモチベーションが高まり、自発的な学習を促す可能性がある。

当日の発表ではさらに詳細なデータを加えて、学習成果の評価・活用の推進における学習履歴の可視化・デジタル化の有用性と課題を提示する。令和6年度はオープンバッジ発行対象事業を新たに五つ加えて実施しており、本年10月末までのオープンバッジ受領者は累積で約220名となっている。また今年度はオンラインだけでなく集合・対面形式でオープンバッジ受領者交流会を開催予定である。次年度以降も本調査研究を進めていくことで、生涯学習分野で活躍する方々の学びやスキルを価値付け、更なる学びのモチベーションの向上を図り、社会教育人材の発掘・育成につなげていきたい。